

「内なる願い」をイベントに

IYYのイベント戦略

村上宏征

一——IYYとは

今年、一九八五年は国際連合の定めた「国際青年の年」(International Youth Year: 略称IYY)です。

そのテーマは、「参加」「開発」「平和」で、国連がIYYを設けるにいたった背景には、青年(一五〜二四歳)の八日本では一二〜三〇歳としているV人口が世界的に急増しているという事実があります。

世界の青年人口は一九七五年に七億三、八〇〇万人でしたが、二、〇〇〇年には一一億八、〇〇〇万人と、約六〇%も

増加すると推定されています。なかでもアフリカ、アジア、ラテン・アメリカの開発途上地域では、この四半世紀にほぼ倍増するといわれています。

こうした青年人口の急激な増加は、青年の大量失業、麻薬等の常用、また特に開発途上地域ではその他に教育機会の稀少化など枚挙に事欠かず、経済や社会の発展に深刻な影響を与えることが必至とされています。

また、地球社会の将来を展望したときそこには資源枯渇、地球汚染、核軍拡競争、南北問題、人口・エネルギー・食糧・難民問題など、これからの世界の中核

たる青年の取り組みいかにかわる問題が山積みされています。

世界青年意識調査によると、国籍や貧富のいかんを問わず、青年はこれらの人種の過半数が直面している問題の解決に役立つことを望んでいます。

この青年の今日の世界における実態と明日の世界に対する要望に十分な関心を向けることがIYYの目指すところだといえます。

しかし、現代の青年に地球の未来を託すことができるでしょうか。最近特に多いといわれている無気力で無関心な青年に希望や期待を込めて未来を託せるはず

- 一——IYYとは
- 二——IYY横浜実行委員会の誕生
- 三——青年活動とイベント
- 四——IYY横浜実行委員会のイベント戦略 (IYYフェスティバル'85)
- 五——内なる願いのイベントをつくる

がありません。将来を託すべき青年が自分本位に生き、他者と共に生きることに関心をもちたいとすれば、私たちの社会には展望のない、絶望的な明白しかないこととなります。

IYYは、そんな青年たちに現実の問題を直視し、その問題解決のための行動を起こす青年が、数多く誕生することを願って制定された国際年なのです。したがって



International Youth Year
1985

IYYとは、これまで行われてきた青年活動の活性化だけでなく、未組織、無関心の青年を巻き込んでの運動としなければならぬのです。

IYYにおけるイベント、そこにはこの大きな課題があるのです。

二 IYY横浜実行委員会の

誕生

①—一般公募はしてみたが……

横浜市におけるIYYの取り組みは、全国的に有名で、その大きな原因としては、事業等の実働部隊である実行委員会を既存の青年団体だけにとどめず、マスコミ等を通じ一般公募したことがあげられます。

一九八三年六月、市内にある五〇余りの青少年関係機関、団体、組織等の構成による国際青年の年横浜推進協議会（会長・細郷道一横浜市長、委員長・高井修道横浜市立大学学長）が設立され、その基本方針に基づいて事業等の実行部隊である青年実行委員会を一九八三年十月に一般公募しました。

しかし、そこに集まった一一九人のメンバーは、留学生、身障者、学生、勤労青年、青年活動家など多彩すぎる顔ぶれで、集まってきた目的も、やってみたい内容も、てんでバラバラで、統一の理

念として目標がありませんでした。そして、そんな組織は次第に活力を失っていったのです。

②—新しい青年活動をつくらう

しかし、一部の有志の間に「従来の青年活動の継続ではだめだ。国連の主唱するIYYの真の成果を上げるには、今まではない新しい展開が必要なのではないか？」という声が聞かれるようになりました。

今のままの青年、今のままの活動では不足だからIYYが叫ばれているのである。新しい青年活動をつくるのがIYYを進める一つのキーポイントになると考えられたのです。

③—単なるお祭りにはしたくない

IYYを、お祭り騒ぎで終わらさな!! これは、唯一、私たちが統一してもてた理念でした。必ず何らかの問題提起を含んだイベントを展開するために、私たちは問題提言集と事業企画提言集をつくりました。

何の問題提起あるいは解決のために、どんな事業を、どんな風に行うのかを一枚にまとめた用紙を一人一人が書いていったのです。

理念なきイベントはやらない方がいい。これは、IYYのイベントの鉄則で

なければならぬと思います。

④—青年の三大イベントはやらない

今、全国どのIYY組織のイベントをみても、三つの特徴的なイベントが見られます。

それは、コンサートとキャンプとシンポジウムです。青年のイベントは、この三つを語れば、語り尽くされてしまいうな気がします。

コンサート一つをとってみても、どれも似たような構成で、冠に「IYY」とつけるか「チャリティー」とつけるか「アフリカ救済」とつけるかの違いだけ、単にネームを利用しているだけです。中身はどれも同じで本当にIYYやアフリカの現状を知ってやっているのかは疑問です。

つまり、単なるブームとしてのイベントであり、スタッフ側にも参加者側にも「内なる願い」や「内なる祈り」があるイベントではないのです。

IYYのイベントには「内なる願い」「内なる祈り」が込められていなければならぬのです。

たとえば、サザンオールスターズを呼べば、横浜スタジアムは、三万人の青年で埋まることは分かっています。しかしそれが何の問題提起になるのでしょうか。積極的に社会に参加する青年を育て

られずしてIYYのイベントは無意味なのです。

三—青年活動とイベント

①—人の触れ合いの場をつくる

青年活動において無視してはならない原則、それは多かれ少なかれ青年は、人との（特に異性との）触れ合いを求めているということなのです。

組織にどんな崇高な理念があろうと、組織を動かしているのが人である以上、人の触れ合いを無視して青年活動は語れません。これと同じことで、イベントにも人の触れ合いがなければ、それは必ず失敗してしまいます。

②—強い者に学べ

弱者と手を取り、共に生きていく社会をつくるのがIYYの目的の一つでもあります。

しかし私たちの組織（IYY横浜実行委員会）のように期限付の組織には、それだけでは許されません。IYYの期間中に自立する力、存続するための力を養わなければならないからです。

私たちが学ばべきは、力のある組織、金の動かせる組織です。その実現として、私たちは、横浜青年会議所（JCC）のつくっている「横浜どんたく」において、イ

イベント作りのノウハウを学びました。

⑥—計算された無鉄砲さ

ただ単に無鉄砲なのは愚か。けれども相手の出方を予想した上で、ある程度、度の外れた戦法にでれるのが青年の特権だといえます。知っていることでも、頼りにして何度でも聞いてみる。それが相手に覚えてもらうことにつながり、また、頼りにされているという感覚を作り出し、何だかんだといって協力してもらえらるのも、その一例です。

企業と渡り合いたいなら、会社四季報などに目を通すなど、したたかな研究心と社会の流れに対する深い洞察力が、これからの青年活動には必要であるといえます。

④—ハッター八割ホラ二割

青年活動にかかわらず、ついでいけないうのがウソ。でも、その一歩手前のハッターやホラは、自分自身を刺激したり相手を刺激するには、非常に有効な手段といえます。

特に青年活動においては「ハッター八割ホラ二割」くらいが良いようです。ハッターとホラの違い、それは実現の可能性と、その責任性の高低にあると思います。自分や相手を刺激し、活性化するためのハッターやホラは、「夢を語る」行

為と何ら変わることはなく、青年活動を行う上で重要なポイントとなります。

⑤—イベントに経営意識を持つ

青年活動に金儲けの話や、企業などを巻き込んで活動を行うことを嫌う方が大変多くいます。

しかし、イベントを行うには、お金が必要で、それも多ければ多いほど内容も充実します。しかし、世の青少年団体の活動者は純粋なる内輪の資金、そして手作りのイベントをモットーとして、その活動範囲を狭くしているようです。

企業等に協賛を依頼するということは、単に資金援助をしてもらうということではないのです。イベントの内容、趣旨をよく理解して頂き協力をお願いするということなのです。したがって、企業ベースでイベントの内容や趣旨を変更もされない限り、どんな協力を依頼すべきだと思えます。また、行政関係の機関もその活動内容を十分研究し理解していれば、その職務にからめていろいろと協力要請の対象となります。

金や物が欲しくて協力・協賛を依頼するのではなく、あくまでも趣旨を理解して欲しいから依頼するのです。内輪で済ませる、手弁当で済ませることは容易ですが、絶対に活動は広まらないのです。

四— IYY横浜実行委員会の

イベント戦略 (IYYフ
フェスティバル'85)

①—イベントは手段であり目的ではない

IYYのイベントにおいて大事なことで、それは、イベントの形としての成立のみに力を注ぐのではなく、IYYの趣旨を見失わないことです。動員数であるとか話題性であるとかにこだわっていると、何のためのイベントなのか分からなくなってしまう。

また、青年活動IIイベントではありませんが、自らの趣旨や活動を伝え広げる手段としてイベントは大きな役割を果たすものであると思います。そしてイベントにおいて大切なことは、いかなる願いや祈りを込めてその内容をつくるかにあるのです。

とかくイベントという「お祭り屋」的要素が強調され、単に内容のないバカ騒ぎを連想する人がたくさんいます。そして、学習会など知的集会和区別し卑下する考え方があります。

また世の中には、お祭りが好きな人もいれば、静かに語らうのが好きな人もいます。でもそんな人たちのすべてが参加できるイベントはないのです。ですから、イベントの内容によって参加者の対象を絞ることにあります。

スタッフが楽しめればよい、人が集まればよいというイベントは、IYYでは御法度なのです。イベントは手段であって、それが目的であってはならないのです。

②— IYYフェスティバル'85

まず、私たちが行ってきた数々のイベントは、すべて「IYYフェスティバル'85」という一連の統一タイトルで展開しています。

これは、イベント名称を統一することによって、名称の周知徹底を図るとともに個々のイベントに参加した人たちの連帯感を育てることを目的としています。

つまり、十一月末に行う予定のIYYフェスティバル'85へ各イベントの参加者が集積されるように、プログラムを組んでいるのです。すべてのイベントが、このIYYフェス

IYYフェスティバル'85



ティブアル'85への布石なのです。

また、イベント名称統一は散在するイベントに対し統一の広報を行うために有効な手段となります。私たちは、「IYYフェスティバル'85」というタイトルの統一のぼり二〇〇本と横断幕四本を企業名入りで作りました。

これによって各イベントの街頭PRは統一されることになり、また使用頻度が高い分だけ協賛金額を引き上げることが

できます。また、他のIYY推進団体に

貸し出すことにより、イベント名称のPRが図られることになるとともに、外部には同一の団体が幅広く展開しているイベントとしてとらえられることになりました。

それでは、具体的に私たちが行ってきた事業の紹介を行います。

① ALL CLEAN 外人墓地

これは、私と外人墓地管理委員会委員長であるペイカーベイツ氏とが、市政一〇〇周年のための会議で、たまたま隣り合わせになったことから始まったものです。

現在、横浜外人墓地には約四、二〇〇人の方が埋葬されていますが、その内、約三、二〇〇人の方は国内に身寄りのない、いわゆる「無縁仏」です。

それにもまして二万㎡におよぶ広大な墓地は、外人墓地管理委員会という在日の外国人の方で作っている組織によって管理されているだけで、常勤の管理人さんをはじめとして数人で運営しているのが実情です。

函館や神戸の外人墓地

は、市の管理下にあるため整備や手入れがいきとどいていますが、横浜外人墓地はそれができていません。

私たちは、この横浜外人墓地の清掃活動を行う上で、次の三つの目的を掲げました。

それは、広く外人墓地の状況を知ってもらうこと、次に、在日外国人の方との共同作業の場を作ることで、そして山手という地区に世代を越えた連帯を作ることです。これが私たちの「内なる願い」なのです。

まず、外人墓地の現状を知ってもらうこと。ただ、外から見るだけでなく内側から外人墓地の抱えている問題を知ってもらうことが、真に外人墓地を愛する市民にとって不可欠なことだと思います。

そして、在日外国人の方との共働作業の場をつくることです。横浜は国際都市と呼ばれる割には、市民レベルの交流が少なすぎると思います。また、在日の外国人の方も居住区を固めていたり、学校、病院、店のたぐいも、日本人とは別に作る傾向がありすぎると思います。一番端的な例が、市内でグループ同士で交流している日本人と在日外国人の方の姿が非常に少ない現実があります。

これは、常日頃の交流を図る機会が非常に少ないからだと思えます。ならば、

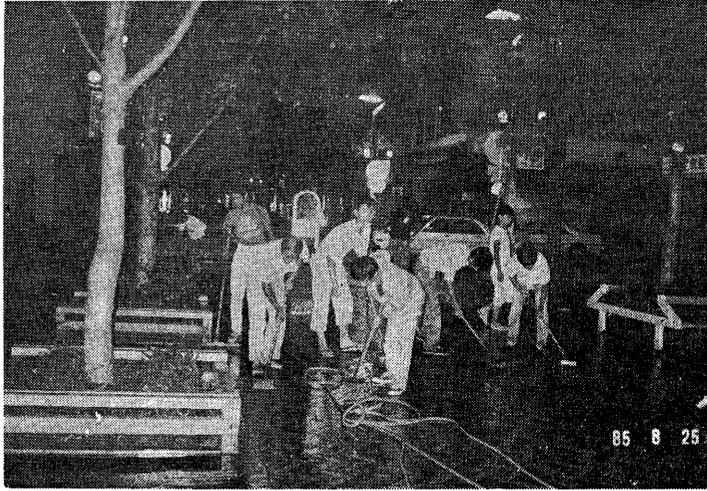
日本人と在日の外国人の方が、ごく自然に共に行える交流、作業の場をつくることに必要だと考えたのです。

そして、山手地区に世代を越えた連帯を作ることで、今の山手地区には連帯感が少ないように思います。と、いうのも老人クラブが一つもないという事実が示すように、老人がいても自分の教え子とか部下に声をかければ相手をしてもらえるような人たちが多く、つまり経済的にも人脈的にも豊かな人が多い町なのです。したがって、話し相手を探しに近所に行くという付き合いが少ないのだそうです。これは、今回の清掃で痛切に教えられたことなのですが、清掃参加を全戸回覧で回してもらっても一人の参加もなかったという事実が如実に、その裏付けをしてきています。

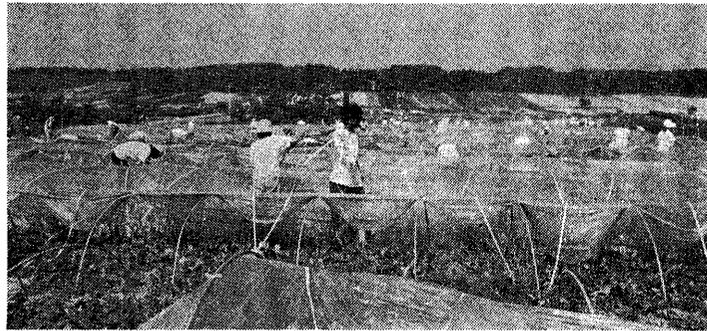
そんな、私たちの「内なる願い」を込めて始めた清掃活動ですが、結果的にはお盆明けの暑い日中（八月十八日）ということにもかかわらず三歳から七歳までの約一五〇人の参加者を得、好評の内に終わることができました。

この作業には、多くの方の協力がありました。中でも市の「さわやか運動」にからめたこと、遺族にかかわりのある方に声をかけたことが大きな成果だったと思います。結果的に、清掃道具を始めとして飲食物を無料でそろえることがで

写真一2 よこはま24時間まつり



写真一3 ささにしきトライアングル国際交流



きたばかりか、インターナショナルスクールや外人墓地に関係する機関や個人との広いつながりができました。

これは、私たちの求める広がりのある青年活動の一步だといえます。IYYは単に青年同士が何かをやったり、青年が中心になってイベントをつくる年ではないのです。IYYは、青年が主体的に活動して世代や国境を越えた人たちとの交流と理解を図るためのものでなければな

らないと思います。
④よこはま24時間まつり
某民放TV局が、一年に一度「愛は地球を救う」をテーマに、一昼夜そのTV番組を通して募金を呼びかけています。

その中でよく見かける光景として、アイドル歌手や欽ちゃんに会いたくて、自分がピンに詰めた一円玉より多額の交通費を払って日本武道館に行く人がいます。

あれは、どう考えても地元の銀行に振り込めばよいことであって、結果としてブームとしての募金に終わりがちです。

特に青年は、年に一度だけ募金して満足していたりしてはいけません。青年には、いつでも社会や他の人に対して奉仕できる可能性があるはずで、そんな青年の奉仕活動に対する参加の可能性を訴えるために幅一七m、長さ八〇〇mの伊勢佐木町商店街のカラータイ

ルを百人の青年で徹夜で磨きあげることと、本当に二四時間体制の募金を行ったのが、この「よこはま24時間まつり」です。

本来なら、外で夜を明かすことを認められない中高生も、この日はかりは保護者の承認を取り参加可能です。まず、条例などの法律を知ること、そしてそれのつとり可能な範囲の前例を作ってしまうこと。これも、計算された無鉄砲さの一例です。

また、このイベントでは趣旨を多くの人に知ってもらうためにチラシを作りましたが、どこにもある普通のチラシを作っても、だ

れも見えてくれないことは分かっていたので、チラシにどうしても見なければならぬ工夫をしました。

それは、チラシに付加価値を持たせるために商店や企業から賞品を提供してもらい、イベントに関するクイズを出題したのです。賞品を当てるためには、クイズを解かなければならない。クイズを解くためには、チラシをよく読まなければならない、という風にしたのです。

このイベントでは、伊勢佐木町商店街の多くの方の賛同と協賛があり、一つの地域イベントとして定着していく感があります。このように、その地域の特徴を活かしたイベント作りをすることも成功のポイントだと思います。

⑤ユースアクションコンクール
来る昭和六十四年の横浜市政一〇〇周年の記念事業に合わせ、今のうちからそのイベント案を集め実行体制を作ってしまう、というのがこのイベントです。

今までの実行型のイベントと違い企画募集の形式ですが、この目的は、いまでもなく市政一〇〇周年の中に私たちのアイデアやメンバーを送り込むことにあります。企画財政局の方との交渉も含め私たちの存在を印象づけたことがよかったのか、結果として一〇〇人委員会の中に四人の実行委員を送り込むことができました。集まったアイデアは、現在集計

中で近いうちに実現させるか、または市政一〇〇周年に向けて実行組織の基盤作りを始める予定です。

② ささにしきトライアングル国際交流

都会の青年と地方の青年、そして在日外国人青年の農村における三つ巴の民泊交流を行ったのがこのイベントです。

国際交流や国際理解が叫ばれている今日ですが、一方で、はたしてどれだけ国内の理解をしているのでしょうか。嫁不足、職不足、過疎化など言葉に聞くものの、真にその実態を都会の青年も在日外国人青年も知らないのが実状です。それと国際理解や交流といっても外国から来たばかりの人と一夜だけカクテル

パーティーを囲みレクリエーションを楽しんでも、どれだけ本音の交流ができるのでしょうか。

私たちは、まず足元の在日外国人の方との日常的な交流が始められる交流を目指すには、とにかく長期的に寝食をとるにするプログラムが必要だと考え、まさに二重三重の願いを込めてこのイベントを作り上げたのです。

結果は、在日外国人の方三〇人を含めて約一〇〇人の大軍で山形県遊佐町へ六泊七日の民泊を行い、農作業体験、地引網体験、盆踊り参加、星空討論会などを行い三者の交流と理解を存分に図ってきました。

この流れは、今後、相互の交流プログラムとして留学生会館訪問、遊佐町青年の受け入れなどに発展させる予定です。

③ イベントの成功・失敗は自分で決めるもの

イベントが成功したか、失敗したかは外部の人が決めるものではなく、主催した自分たちが趣旨の達成ができたかどうかで決めるものです。

ただ、イベントが成立し、参加者、協賛者に恵まれるコツはあります。

それは、心の触れ合いのあるもの、地域の特性やニーズを活かしたもので、そして趣旨が明確で単純であるものであること

とです。

五 内なる願いのイベントをつくらう

最近、地域コミュニティの活性化を図ることを目的に祭りの復活や振興が盛んです。

でも、イベントは、やはり「内なる願い」を込めて企画すべきだと思います。「内なる願い」の表現の手段としてイベント作りを行うべきだと思うのです。

△ I Y Y 横浜実行委員会常任委員長▽